金壹萬五千圓也　大正七年十二月　無線電信学校へ寄附
金参萬圓也　大正七年十二月　兵庫県警察官慰安基金へ寄附
金拾萬圓也　大正八年　東京乃木神社建設費へ寄附
金壹百萬圓也　大正十二年九月　関東大震火災罹災者へ寄附

跋（はつ）

鈴木よね子刀自が亡父の門に和歌の道を聴きに見えたのは大正十二・三年の頃と思う。刀自は巾幗の身を以って鋭意実業界に雄飛せられつゝ、ありしは世間周知のことであるが一方早くから文雅の道にも志篤く和歌俳句茶道などにも造詣があり、非凡な人格の反映を窺うことが出来日頃大方の模範として其の高風を慕われている方であった。

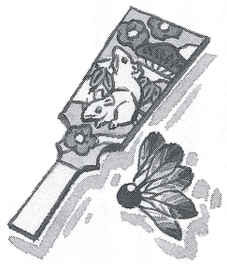
昭和三年六月には其の所作約三百首を纒め「鈴の音」と題して梓（し）に上され、昭和七年には父の社中なる清水社同人の歌集「しみつ」にも数十首を寄せられている。爾後愈精進を続けられていたが、昭和十四年は恰かも米寿に達せられるので其の記念にもとて更に歌集出版の志を持たれ、其が印行のことに就いて亡父も相談を受けて居たようであった。然るに刀自はゆくりなくも昨年五月敢なく急逝されたことは誠に惜みても余あることであった。其年の末に刀自の御遺族から折角遺稿として版行したいとの御話がはじまり、当時まだ健在であった父も是を諒として歌稿の校閲を初め概ね完了した、或はまだ見直しをする心算であったかとも思われるが、是に先だち其分類整理について一二の人の手助けを求めていたのであった。本年になって一月中旬かりそめの病床に臥した父は薬石効なく鈴木刀自の後を追って遂に二十五日白玉楼中の人となった。茲に於てか不肖な私が亡父の遺志を体して刀自の歌集鉛槧（えんざん）の業に當たらねばならぬ因縁が生じたのである。素より其道に疎い私としては誠に鳥滸の沙汰であるが幸にも清水社同人　佐野眞子、横田信子両女史の心からなる御手伝を得たゝめに漸く剞劂の運になった次第である。

今校正略成るに方りて、鈴木刀自が屢拙宅にお見えになった頃の風貌を思い浮べ、將たこれに接して諄々お話の相手をしていた亡父の俤などを想起すると万感の胸に徂徠するを禁じ得ないものがある。刀自も亡父も今一年で米寿を迎えんとする八十七歳で世を去られたことも思えば不思議な因縁と言わねばならぬ。

播磨灘須磨塩屋あたりの松籟（まつかさ）に趣を添えたであろう波の音に因んでそのまゝ「波の音」を題名とした。編輯万端甚だ拙劣なるは故刀自並に遺族有縁の方々に対して深くお詫びする次第である。亡父世にあらば今少し手際の好いものが出来たことであろうと思えば益々忸怩（じくじ）たる感なきを得ない。一言蛇足を附して跋とする。

昭和十四年四月

吉井　良尚



「島　京子 著

幻の商社に実在したもの

鈴木商店女主人・鈴木よね

――「黎明の女たち」より抜粋

端正な婦徳

明治七年（一八七四）、神戸内海岸通五丁目（いまの関西汽船乗り場近く）の一砂糖小売商から出発し、大正期に全盛をきわめ、ついには傍系会社（神戸製鋼所・帝人・日商岩井・豊年製油・播磨造船所・日本セメントほか）六十五・国内外の支店出張所百五十・社員総数二万五千を擁するまでに巨大化し、昭和二年金融恐慌のため倒産した総合商社鈴木商店の軌跡は、現在、歴史としてみる限りでも、実に衝撃的なドラマである。

同時代を生きた人々にも、むろん鈴木商店の消長のすべては見通せず、歴史として研究するものにも、なお多数の部分が時とともに急速に消滅し、人間の営みの果敢なさを思わせるかにみえる。

鈴木商店主、よねの名は、ヨネ・スズキとして、二十世紀初頭世界の財界に君臨し、女王の称をほしいままにしていた。事実、商取引きの最盛時、大正八年（一九一九）から九年にかけ、輸出入の取り扱い貨物船は七十五隻（九千トンクラス）に及び、当時スエズ運河を通過する約一割の船舶は、鈴木の米（よね）マークだったと記録されている。年商も十五億四千万円に達し、このとき鈴木は三井を抜いて、わが国貿易商社のトップに立ったのである。

昭和五十九年十月二十六日、秋空が高く澄む午前十一時、阪急御影駅山側にそびえ建つマンション、〝メゾン白鶴〟に高畑千代子氏を訪ねる。明治三十四年（一九〇一）生まれの千代子氏は鈴木よねの愛孫。鈴木王国のさかんなころ、孫姫様として成長し、現在まで幸せな人生を過してきた、と聞いている。

八十三歳の千代子氏は、兵庫県立第一高女出身、中背でまだまだ美しく、聡明でもあった。「祖母にはかわいがってもらいました。祖母はもともと平凡な女性で、主人が亡くなったなりゆきで、ああなっただけで、いまふうの女実業家、女社長的では絶対ありません。まあすべて番頭の金子直吉さんと柳田冨士松さんを信頼し、会社のことは知りませんでした。西川文蔵さんのことは尊敬していました」

いわゆる攻めの金子と、守りの柳田といわれた絶妙のコンビ番頭に加え、明治二十七年（一八九四）学卒近代派の西川が入店、鮮やかな帳簿計数処理、経済知識、経営力に驚嘆すべき才腕をみせるに至り、鈴木の基礎は固まったというべきか。

「その西川さんも、手をひろげる一方の、金子さんのやり方を、とめることができず、鈴木はつぶれたけど、いまだったらつぶれなかったと思います」

会社のことは、すべて金子たちにまかせていたよねだが、千代子氏の知る限り

「毎日出勤していました」

よねはきわめて行儀よく、正座し首を伸ばしたまま何時間でも過すことができた。いまに残る写真を見ても、端正なやや男性的な顔と、

ふとい首、当時としては、大柄だったという身体を、実に身じまいよく、常に地味だったという着物に包み、端然と坐っているばかりだ。

「きちんとした性分でしたね、ぞんざいなことをしたら、よく怒った。そう頭はよくなかったけれど、まあしんぼう強いこと、グチを一切こぼさないこと、なんかが長所でしょうか」

髪は少なくなっても、小さな丸マゲをちょこんと結うてました。旅行好きで、私も父（二代目岩次郎）と一しょに、よくよねについて旅行しました。――朝鮮にまで行った、という千代子氏の話は、聞いていて飽きなかった。

よねの初孫として生まれ、よねに溺愛されて育った千代子氏の祖母観には、肉親ならではの真実が感じられる。が、よね自身、鈴木商店の急激な変遷がどうであろうと、またよね個人に対する世間の毀誉褒貶がどう渦巻こうと、終始一貫して、最初の一砂糖商時代からの姿勢を変えなかった、という外部の人たちの、口を揃えた証言は、よねを語るうえで逃すことのできぬ大きな要素だろう。

『兵庫人物鑑』（大正年代）によれば

「鈴木よね＝男も及ばぬ英気と膽力あり、しかも居常倹素にして、女性としての美徳に富み、まれにみる女流界の傑物

とあるが、千代子氏は

「まあ、ハラはすわってましたわね」

とさりげない。

鈴木よねは、嘉永五年（一八五二）八月十五日姫路城の見える姫路市米田町の、屋号丹波屋西田忠右衛門の三女として出生。当時米田町は、蝋燭屋・和菓子屋・太物屋（木綿・麻布を商う呉服屋）・茶商・生姜板屋などが、軒高の低い厨子二階を並べる古くからの商家町で、丹波屋は仏壇の漆塗を業としていた。忠右衛門はもと丹波の山奥の漆採集人だったが、塗物産地である姫路の塗師屋へ、大きなまげ籠に採取した生漆三升を入れ、月に一度か二度丹波から届けにきていた。

米田町の「塗師惣」こと福田惣平は、商売物の漆のほか、季節には自然薯などの手土産を忘れずたずさえてくる忠右衛門の正直実直な人柄を見こみ、しきりにすすめる。

「お前はんの商いもしんどいやろ、どや、女房も連れてこっちへ出てきて、塗師職をやったら」

忠右衛門は誘いに応じ、妻りよと同じ町すじに借家住まいの商いを始めた。商売は成功し、働きものの夫婦のあいだには男四人女三人の子供も生まれる。

よねの子供時代は、幸せだったといってよい。麦の穂が一せいにのび揃った緑一色の中を、白鷺城を見ながら走り遊び、北山よりに建つ西田家の檀那寺本竜寺に、幾度となくツツジをとりに行った。

近くの船場川では、清流に木綿が晒され、晒し終えられた木綿が幾条も、河原で風にひるがえるのを飽かずに眺めた。また、兄について鮒釣りにもよく行った。釣りはその後のよねの、主たる趣味ともなっている。

三味線、茶の湯、裁縫をたしなみ、年ごろになったよねが、最初に嫁入りしたのは、主家すじ福田家の二男惣七のもとであった。ひきつづき惣七の妹ゑみが、よねの次兄竹蔵に嫁いでき、両家は重縁の仲となる。

よねが不縁になったのは、次兄夫婦のいざこざが原因だった。両家の場所があまり近すぎたのも災いした。二組の夫婦仲は破綻したが、

明治時代の離婚は、現代よりずっと多く、結婚観はかなり自由、かつ合理的であった。

そのころよねの長兄二代目忠右衛門は、田舎の塗師風情で終ることを拒否、早くから開港で賑わう神戸へ出ており、銀相場に賭け、洋銀両替商として名を成すまでになっていた。

明治十年（一八七七）よねが二十六歳で、神戸の砂糖商鈴木岩次郎と再婚したのは、兄忠右衛門の縁による。

岩次郎の父は、もと川越藩の足軽の二男徳治郎で、生活のため江戸へ出、飛脚にまでなったが、貧乏から脱することはできず、徳治郎の二男に生まれた岩次郎は、生まれるとすぐ魚屋に養子に出される。十二、三歳で、なぜか魚屋を放逐された岩次郎は、日ごろから憧れていた菓子を商う菓子商に丁稚として住みこむ。彼は他家で生きてゆく知恵は勤勉第一と心得、いつのまに身につけたのか、並々でない商才を武器に、着実に小金を貯え、若くして独立、場末に砂糖や駄菓子を売る店をもつ。一軒の家の主となったわけだが、まもない一夜、幾年も漂泊の旅をつづけていた父徳治郎が舞いこんできた。つづいて兄文次郎もやってき、居つくに及び、岩次郎は折角の小商いの店を彼らにゆずり、とび出してみたが、歩いて神戸までくるころには無一文となっていた。

彼は奉公先をみつけては、働きつつ西下をつづけ、長崎に至る。長崎で菓子職人としての修業を積み、再び神戸までたどりついた岩次郎は、脚気を病み、木賃宿でぶらぶらしながら、宿の客引きの手伝いなどをしていた。そのうち、弁天浜に店を出した大阪の砂糖商・辰巳屋松原恒七のもとで働くことになる。

下働きから始まった辰巳屋での仕事であるが、何をあつかっても粗略ということはなく、商品である砂糖の選別眼は、他の奉公人より抜きん出ていたので、次第に重用され、先輩をおいて、明治六、七年ごろには、番頭となり、ついには店を譲り受けてしまう。辰巳屋の商号を冠し辰（カネタツ）鈴木岩次郎商店が、再度の出発となった。

旧幕時代、砂糖は貴重品であり、砂糖を商うものたちの目は、幕末から明治にかけ、いち早く海外に向けられていた。そのため日本の輸入貿易は、まず砂糖から始まったといってよく、ついで砂糖商たちは一般物品の貿易にも着眼しはじめ、貿易界をリードしたのである。

洋糖引取商（輸入商）としての鈴木商店の名は、明治七年ごろすでに登場していることが記録にあるのをみても、岩次郎の商法がいかに積極的であったかがわかる。

神戸財界の花形として、岩次郎が重きをなすようになるのは、明治十七年（一八八四）前後からであるが、それより二年前、彼は革新的な共同企業として、神戸石油商会を設立している。砂糖に加え樟脳、薄荷部門への進出が始まり、二十四年岩次郎は神戸商業会議所議員に当選する。

土佐の名野川村の貧家から出てきた金子直吉が、憧れの鈴木商店に入店したのは明治十九年四月、直吉二十一歳のときである。ちょうど神戸では川崎造船所が造船事業を開始したばかりであったが、鈴木商店はすでに神戸有力八大貿易商にランクされていた。鈴木商店は栄町三丁目にあったが、当時の栄町は船宿や豪商、商館が並び、明治二十年代になると、日清戦争に従軍しての帰りの正岡子規をして、「その美、その壮、名状すべからず」と書かしめるほどに発展する。田舎から出てきた直吉も、胸おどらせたにちがいないと思われるが、当初の

直吉の昂揚感も長くはつづかなかった。主人の岩次郎は、激しい気性をそのまま言葉や行動にあらわし、直吉の失策を許さなかった。大声で叱責し、ときにはそろばんで頭を殴る。それより直吉が失望したのは、居留地の外国商館をはじめ得意先の賃金の取立てばかりが仕事であって、望む貿易の仕事を見習うチャンスがないことだった。

脚気を口実に、三か月で直吉は土佐に逃げ帰った。

よねは、岩次郎がみていなかった直吉の一面、機械のように早く回転する頭脳と、商売に必要な才を見抜いており、ほどよいところで呼び戻しの手紙を書き送っている。

「お前さんがまじめに働いていたことは、私がよく知っている。主人はがみがみ言っても、あれは生まれつきゆえ、気にすることはいらぬ。身体がよくなり次第帰ってくるように」

という意味のことを認め、旅費を添えて直吉に送る。この措置は直吉の心を打ったであろう。直吉も三か月のあいだに、岩次郎を助け、店の奥向き一切と、店員の衣食のめんどうをみて、こまかくゆき届く配慮をみせていたよねの裁量は、身に沁みて知っていた。

直吉より一年早く入店した柳田冨士松も、直吉と三か月寝食をともにするうち、自分にはない直吉の企画性、積極性は十分見抜いていた。

二十代の二人の若ものは、よく働いた。砂糖の売り込みのため、西は明石・姫路、東は京都へまでも、草鞋を履き、街道の土ぼこりを浴びながら歩いた。注文取りの仕事は、大へんな重労働であったが、疲れて夜おそく店へ帰り、よねの

「ごくろうさんやったな、疲れたやろ、早う風呂へ入って、ごはん食べなさいや」

口先だけではない、親身なねぎらいの言葉を聞くと、何も言えなくなるのが常だった。

柳田冨士松の長男義一氏は、幸いいまも、神戸京町筋のクレセントビル六階の太陽鉱工株式会社に勤めている。八十七歳の長寿であるが、俳句作者として、また鈴木商店関係者で組織している辰巳会の世話人として、元気で活躍し、鈴木商店に関することを取材にくるマスコミ関係の人たちをさばいている。義一氏は言った。

「お家さん（よね）は、学はなかったけど、人の心の機微がようわかっとりましたわな。ひと言でいうたら、かゆいところへ手が届く、ちゅう人でしたわな」

よねは、店員たちをそれとなく観察し、性格を言いあてる。

そのころ柳田家は、鈴木商店の地続きにあり、生まれたときから、よねに風呂に入れてもらったりして育った義一氏は、よねに母親のような懐かしさと、女主人としての畏敬をいまも持ちつづけている。

かくされていた真実

明治二十七年（一八九四）、短気で怒りっぽかった岩次郎が、その気性のように、煩いもせず、五十四歳で突然病死した。

店は、砂糖は柳田、樟脳は直吉が専従という体制が定着し、順調に業績を伸ばしはじめた矢先の不幸だった。ことに値動きが激しく、投機色の強い樟脳をあつかう直吉は、漸うその樟脳売買のコツをのみこみはじめたばかりであり、また商売のおもしろさも身につきだした時期である。

よねは四十三歳で寡婦となった。遺児徳治郎（二代目岩次郎）は十二歳、岩蔵は九歳、当然店の存廃が問題になった。

岩次郎三十五日忌の法要の席でのことは、感動的でもある女店主誕

生のエピソードが二、三書き残されてはいる。

「――親戚の中には幸い遺産が九万円程あるので此の移り変りの激しい時勢、商売をやめ二児が成長するまで、楽な屋敷ぐらしをしては――という意見も出たが、よねは折角主人がここまで築きあげた身上やし、別に借金はなし、店員もみなよう働いてくれる。とくに直吉は樟脳の方に馴れてきたし、冨士やんは小飼いから砂糖の方は手に入ったものやし――」

毅然として店を継続したいという意志表示をした、というのだ。だが、この席上でのよねの真情は、以後茫々四十年余を経て、よね自身の口から語られる。

昭和十二年盛夏、先出のよねの愛孫千代子氏と柳田義一氏二人が避暑のため六甲山清水荘に滞在中のよねを訪ねた折、よねは四十年以上前の店存廃協議の席での、自分のかくされた心境をしみじみ語って聞かせたという。それはいかにもよねらしい、またよねならではのいきさつだった。

よねは翌十三年五月六日八十七歳で死去しているから、この六甲山別荘での述懐は、言い残しておきたいことでもあったのだろう。

岩次郎三十五日忌の席上、よねの兄西田忠右衛門ほか、強力な親族一同の意見は、廃業に一致していた。よねの考えもまた、再起の機を待ち、ひとまず廃業にほぼ決まっていた。が、

「ひょっと何げなしにやな、直吉の方見たら、直吉がいまにも泣き出しそうな、必死な目ェで、こっちゃをじーィと見てますんや。あないに必死なもの言う目ェ初めてやったわな。その目ェに縋りつかれてしもたんやな。直吉の気持ちがなあ、ようわかって、店やめる、て言えなんだ――」

その瞬間、よねの口からは、自分でも思いもよらぬ

「折角ですけど、わたしはこのまま店を続けてゆくことが、亡夫の遺志を継ぐことになると思いますので――」

いっ気に店存続の言葉が出てしまう。

直吉の小さな目が歓喜と感激の泪に光るのをよねは見た。

「直吉は、目ェでなあ、ありがとうありがとうおますお家はん、よう決心をつけて下はりました、この直吉命を捨てても頑張ります。お店のために働かしてもらいます――と言うてましたわな」

親族たちは、諦めず説得をつづけたが、よねの気持は、もはや決まってしまった。

大きな運命の岐路であった。

情義に厚いよねの、使用人に対するひとつの思いやりの心が、後の日本の経済・産業・流通の基盤を作った、と言ってもよい。

よねの六甲山別荘での述懐はつづく。

「それから、三年ほどして、冬のさむい折、三時すぎてから、栄町四丁目の店の隣の旅館から火が出たことがありましたやろ。店も危のうなったけどな、昼間のことやし、ボンさんやら皆で荷物出して、店からっぽになったときのことや」

よねも、火が移れば、いつでもとび出せるように、実印や鍵、大福帳などの重要書類は懐タモトはむろんのこと、それらに入り切らぬ分は、風呂敷に包み、手許においていた。

よねとしては、若いもののように、あわてて逃げ出す気にはなれなかった。

鈴木商店の女主人として、亡夫のあとを守ってきた店や、地続きの居宅にも名残のつきぬ思いはあったが、それより